大日経三句思想の一考察

方便為究竟を中心として

大日経と金剛経は、真言密教の両部大経である。この二つの経典の中心思想は、一般的に大日経が仏から衆生へ、即ち向門（上転門）の教えである。これに対して金剛経は、小日経の中心思想である。これに対し大日経全体の思想を考察してみたいと考える。

私がこの問題を改めて考えた理由は、三句のうち、方便に説法し、また後智の用を為して他の為に説法す、これなられば、真行者者に用なり、凡位より六度を修行し円満にして成仏の仏心を因となし、弘法大師が筆録されたと伝えられている秘蔵記の三句解釈が出て、これを契機として私の三句思想理解の経となったのである。

1 秘蔵記の三句解釈

大日経三句思想の一考察

全宗の三句解釈に於いて、下に文を読むに異なることあり。また第26には、「中（因）」とは本有善提心を因となし、修行の故に行というまた因なり、南とは（証果）なり。そして、西とは（入楽報）なり。北とは（方便究竟）なり。南とは（証果）なり。
三句文の検討

ここで三句の文を改めて検討して見よう。

A 大日経（漢）には「善提心為因、悲為根、方便為究竟」の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心（東）へ転換させる真如、如来、本有善提心の働きである。

B 一言（前略）「云何彼若彼一切智智を得無量の衆生の為に種々の方便道を以て一切智智を宣説し給うや。」一切智智の用所成の一切智智の果を説いて方便と名。内に方便を具す行所成の一切智智の果を説いて方便と名。内に方便を具す煩悩を除去し、衆生に安楽と利益を与える。」方便と名。内に方便を具す煩悩を除去し、衆生に安楽と利益を与える。方方便智の依り所なり、如来は如来の大悲蔵（大悲為信）の秘密を発起して「方便為究竟。衆生の一切の無知を除去し、一切智智を得 vì」

大悲為根、方便為究竟」と理解すべきである。従って三句は、「善提心為因、悲為根、方便為究竟」と理解すべきである。従って三句は、「善提心為因、悲為根、方

大悲と善提心の関係は、自性清浄なるの善提心は、悲の根を有するものが方便波羅蜜をもって摂取する。悲の門より誓願

２

大日経三句思想の一考察（全）

密を開示する因の方便の事業、善提心方便」と後得智の用を為

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心

善提心の働きとしての用にした、本有善提心（中）を修生善提心
大日経三句思想の一考察（全）

方便の意味

方便（方便）とは、方便に命中して、行方を近づくこと、到ること、来ることの意味である。即ち、方便とはある目的のために一方通行ではなく、往来交通の行為である。いわば方便は、真如が清浄世間智として人間に到達し人間に近づくことを、人間はそれを通して真如に到達させるからである。
大日経三句思想の一考察（全）

大日経三句は、真如の働きに、大悲より起こる
仏の衆生救濟の活動態である。いえならば、如来は衆生救
济の為大悲を以て衆生に利益と安楽を与え（大悲心方便）、ま
た煩悩苦より救う為衆生をして発心させ悟らしめ（菩薩心
方便）。ここに、如来出現の意味があるのである。即ち、仏
入我我入（仏）、というのは、この大悲方便と菩薩心方便
という仏の願力による大悲の働きに、我々相応するに外なら
ないことであって、ここに真言密教の三密加持速疾願の意味
があると思うのである。

それ故、大日経三句は、如来（一切智智）の本質、あるがま
まの姿にして、衆生救濟の如来の働き即ち、大悲を根本とす
る（大悲方便）と、衆生を発菩提心（菩薩心方便）とを現
わしている。従って三句は、衆生を神変加護の大悲願力（方
便業）に参与相応させ、悲を根本とする自性清浄心の本有
生心・導こうとする如来の方便道・衆生の修行道に外ならな
いのである。

大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 c
大正蔵三十九巻・五八七 b
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
大正蔵三十九巻・五八七 a
山口益『空の世界』二三六
（大正大学大学院）